

# いちのせきから ストッパ温暖化

## 激変する四季

### 不安定だったこの一年

ここ数年なかった寒くて雪の多い冬も終わり、春の陽射しも感じられるようになりました。

さて、昨年の春からの一関市の1年を振り返ってみます。

春は、平均気温が平年を下回りながら、寒暖の差が大きく、うららかとは程遠い「冷春」でした。

夏は、一日の最高気温が35℃を超える猛暑日が9日にも及び、平均気温が観測史上最高を記録しました。特にお盆明けから9月上旬までの気温は平年より約7℃も高く、まさに「酷暑」の夏となりました。雨量についてみると、8月31日敵美地区で局所的な大雨がありました。それ以外では盆明け以降雨が降らず、干ばつも激しいものでした。

秋になり、9月下旬の気温は平年を下回ったものの、全体的には高めに推移し

ました。9月中旬以降の1ヶ月は、雨や曇りの日が続き、降水量も平年に比べ多く、秋晴れの稲刈り日和の日はほとんどありませんでした。

冬は、年末に大雪、以後も降雪が続く、平年の数倍もの積雪深が2月中旬まで継続しました。1月の気温も平年より約1.4℃低く、雪の多かった平成13年並みの寒さになりました。

### 原因は赤道付近の海水温?

気象庁では、世界の気候に重大な影響を与える、ペルー沖の太平洋赤道付近をエルニーニョ監視区域として、海水温を測定していますが、平年と比べ6ヶ月連続して+0.5℃以上の時をエルニーニョ、逆に-0.5℃以下の時をラニーニャとしています。

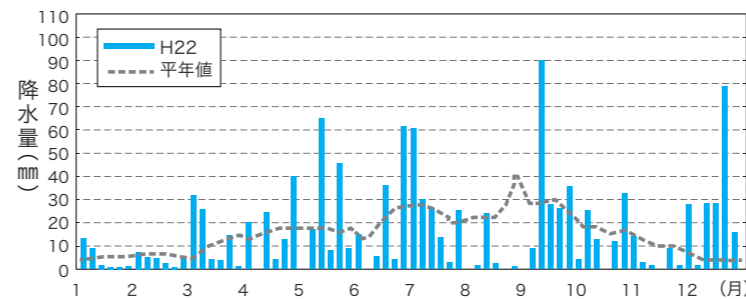
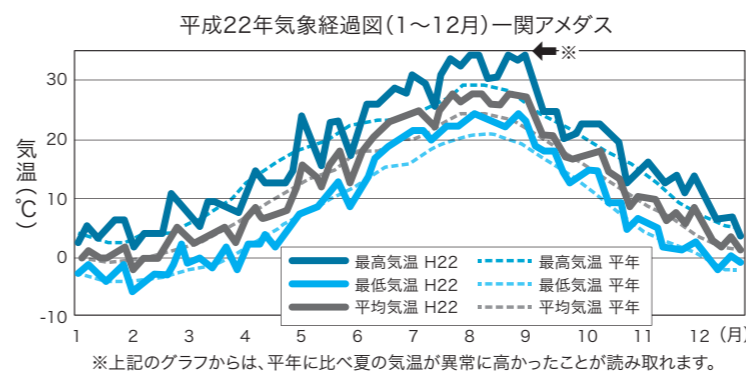
エルニーニョの時の特徴は、日本では冷夏・暖冬、オーストラリアでは干ばつとなり、ラニーニャの時は、ほぼその反対

になるといわれております。

日本における昨年夏の酷暑・今季の寒冬や南半球オーストラリアの猛烈な洪水などはラニーニャの影響と考えられます。昨年夏の酷暑の原因は、温暖化が2割から4割、残りの要因は「エルニーニョに続いたラニーニャ」などといわれています。

### IELからのメッセージ

昨年夏の酷暑から今季の寒冬までに、ナラヤクリの木が枯れたとか、野菜の極端な品不足、東北でのプロイラーの大量死、陸奥湾でのホタテの死滅、年末の大型低気圧による三陸沿岸での漁業被害……。豊穡な自然にもほころびが出始めたのでは、とも感じられます。気候変動の要因は様々でしょうが、化石燃料の大量消費による温暖化が、私たちの住む地球の表面の海水や大気に一層の悪影響を与えているのではないのでしょうか。



全市的には干ばつにもかかわらず、局所的大雨で冠水する国道342号  
(平成22年8月31日 16:11 国道342号)

### 環境への取り組み紹介⑨

#### 三光化成株東北事業部

三光化成株式会社は1965年創立以来、エンジニアリングプラスチック製品の製造と販売を行っており、2000年1月に環境ISOを取得し、スローガン「地球にやさしく、限りある資源を大切に」を掲げ、プラスチック材料廃棄量、電気使用量の削減を活動テーマとし、環境目標の達成に向けて活動を推進しております。

いわて地球環境にやさしい事業所として一関工場は4つ星認定書を頂いており、また、環境負荷物質の削減に向けた活動を行い、お客様の厳しい審査のもと「グリーンパートナー」を取得し、人と地球にやさしい物づくりを行っている会社です。

#### アドプトプログラムによる活動

一関市第一号の企業で、「アドプトプログラム協定」を締結し、一関第二工場(清水)から一関工場(鬼吉)間の市道美化活動として、ごみ拾い、立ち木の剪定、花壇への植栽を行い、景観を保つとともに「ポイ捨て」のない街づくりを推進しております。アドプトプログラムとは、市民と行政で取り組む「まち美化計画」で一定区画の公共の場所を当社が「里親」になり美化推進を行うものです。



#### 環境報告会の開催

地域と共存する企業として歩み続けるため同報告会を開催し、環境改善の取り組み、廃棄物処理及びその削減に至る活動を説明致しました。さらに総合的な環境保全について、工場見学、環境活動紹介、意見交換を住民・行政・当社の3者で行いました。住民の方々に理解と賛同を頂き、企業市民として地域と一緒に今後ますます美化活動を進めてまいります。

三光化成株東北事業部 一関工場(赤荻鬼吉)・一関第二工場(赤荻清水)・宮城工場(登米東和)・弘前工場(弘前)・金型工場(真栗)・平泉工場(平泉)・花泉工場(花泉)以上7工場で活動

### 投稿コーナー

協議会では、昨年9月発行の広報eco第9号で「私が感じた今年の猛暑」と題して、投稿募集をしたところ、3名の方から記事をお寄せいただきました。本号でその投稿記事を皆様にお知らせします。投稿された皆様、貴重な体験をお寄せいただきありがとうございます。

## 私が感じた今年(2010年)の猛暑

### 「猛暑の中の介護現場から」

一関市弥栄  
ペンネーム：茜さん

延々と続く猛暑、介護の必要な方の家を訪問し、調理、掃除などの家事援助やおむつ交換、入浴介助の身体介護などで一日4~5件訪問して歩く私たちホームヘルパーにとって今年の夏はたまらなかつた。

エアコンがつけられている所は少なく、家の中で過ごすのも地獄のようだ。そんな暑さの中で、おとしよりの異変に気が付いた。蒸し風呂のような家のなかで、窓も開けず、扇風機もつけず、汗も出ている様子もない人がいたことだ。訪問後すぐ家の中に風をいれ、扇風機をつけ、水分補給を促し、注意を喚起するのだが、次に訪問してもまたもや同じ繰り返しだ。

ニュースでは、毎日のように熱中症による犠牲者の報道がされ、私たちも利用者の熱中症対策にビリビリしていた矢先、こんなことがおきた。

一人暮らしの男性利用者、夕方1回生活支援の訪問だ。挨拶して入ったが、いつもの返事がない。閉め切った部屋でなま暖かい布団に横になっていた。顔は真っ赤でいつもと違う。急いで窓を開け、扇風機をつけ、冷蔵庫からありったけの保冷剤をだし、体を冷やした。少し経ち意識もはっきりしてきたので、少しずつポカリスエットを飲んでもらい、熱も下がりがすっかり元通りに落ち着いたときは、私もヘナヘナとなっていた。事なきを得たのだが、人の命も奪いかねない猛暑、おそろしいと感じる夏だった。

### 「私が感じた今年の猛暑」

一関市中里  
ペンネーム：あねっこさん

今年の夏は、暑すぎて、体もだるくて、「だるだるダルビッシュ。」毎日ペットボトルの水や麦茶を切らさないように、何本も準備したり、食べものなどは冷蔵庫に入れず、一晩置いただけで、あめてしまったり、食中毒にならないように、温め直しておかずを食べたり大変な夏でした。

茶の間のエアコンはお客さんが来た時しか使わず、扇風機を使い、自分の部屋はドライに設定していました。

我が家の夏バテの解消の秘訣は、母が毎年作る紫蘇ジュースです。特に、炭酸水で割って飲むと、ギリッという喉越しがいいんです。あと、スーパーのアイス売り場では、カキ氷のアイスが、遅い時間に行くとき品切れ状態でした。

毎日、システム手帳にその日の気温、天気などを記録しているけど、前年と比較すると、少しずつ、気温が上がっているのは確か。

夏は夏らしく暑いのはいいけど、その反動で冬の寒さが厳しくなるのかなあって、冷え性の私にとってそれも心配です。

### 「猛暑の夏と農業」

一関市東山  
前田 眞さん

農業が気象条件に左右されるのは自明のこと。私が栽培しているりんごに於いては、早生、中生は暑さの影響を果実肥大の最盛期に受けて、小玉となり、平年収穫の60%と不作となりましたが、晩生種は果実肥大期間が長いので影響は大きくありませんでした。

昔は、農業者は百姓と云って、多種多様な作物を栽培していました。努力してもいつも100%の収量ということは無いので、多くの作物を栽培して全体で70%の収量を合格としていました。これは現在も同じことで、大規模単作で高効率低コスト栽培が毎年出来ることを机上の空論であることを、再び実感した一年でした。特に日本のような、地質・地形・気象条件の複雑な国では夢のまた夢のことです。

りんご栽培で、投入エネルギーを減らそうとして、農業や草刈り回数減らしたら、買って貰えないりんごが沢山できてしまいました。私は一次、二次、三次産業全てを営んでいます。その中で農業が最も複雑でおもしろい事業だと思います。また農業では、体を動かすことが多く、りんご園内を一巡するだけでも3km(約4,000歩)ほど歩きます。余暇時間にスポーツセンターに行ったり、ウォーキングをする必要はありません。健康で省エネ、そして食べる物が生産でき、生きられるのが農業です。

ところで、家は標高350m、東稲山の中腹にあります。当然冷房は不要ですが、室内暖房も使ってはいません。衣服の着脱をこまめに行って、体を慣らすことにより、快適温度を夏と冬で20℃くらい変化させています。アメダスの気温データとの差は少しです。この省エネ生活で、老化防止に役立つかは不明です。近所にも冬は家の中で10℃くらいの「低温生活」をしている人がいます。これも農業など体を動かす仕事をしている人が多いからかもしれません。個人的には自動車を使わず、歩いて生活のできるゆとりが欲しいです。

### 編集後記

昨年4月、一関へ異動となった私は往復約70キロの道のりを毎日通勤しています。今年、愛車の車検があり、走行距離を改めて確認したところ、結構走っていたことにびっくり! 「これだけ走ったのならどれだけのCO2が排出されていたのだろう?」と、ふと考えたのですが、こんな風に感じるようになってきたのは、この協議会への参加がきっかけの一つだと思います。

日々の生活で、環境について「ちょっと心に留めておくこと」、それが地球温暖化の防止にも繋がるのではないかと感じています。寒くて雪の多かった今年の冬は通勤も本当に大変でした。でも、そんな冬もう終わり、春はすぐそこまで来ています。

暖かくなったら、少し遠くのお店にも、散歩がてら歩いて買い物に行こうと思います。もちろん『マイバックを持って』です。(及川和美)

平成23年3月15日発行  
発行責任者/一関地球温暖化対策地域協議会

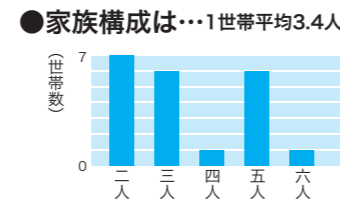
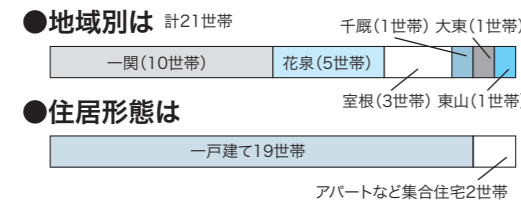
問合せ/一関地球温暖化対策地域協議会事務局(一関市民福祉部生活課編纂) 住所:〒021-8501 一関市竹山町7-2 電話:0191-21-8342 FAX:0191-21-2101  
Eメール:eco@city.ichinoseki.iwate.jp  
ホームページ: http://www.city.ichinoseki.iwate.jp/index.cfm/8/0121.html  
印刷/株式会社日新印刷 印刷に使用している紙は再生紙を使用しています。

# 環 境 家 計 簿

ご協力ありがとうございました。— 環境家計簿「一関版」からみてきたもの —

平成21年9月のeco第6号でご協力をお願いした環境家計簿。平成21年から2年間、毎月電気やガスの使用量を記入していただき、ご家庭のCO<sub>2</sub>排出量を計算していただくものでした。加えて、いかにCO<sub>2</sub>排出量を減らせるかその対策と実践によってその効果も検証していただくというものでした。2年間ご協力いただいたのは27世帯です。今回の分析に当たっては、店舗兼住宅を除いた21世帯を集計させていただきました。ご協力をいただきました皆様に感謝申し上げますとともに今後も環境家計簿の取り組みを周りにも広げ温暖化対策を一層推進して頂きたいと思っております。

## 1. 提出していただいた方々の地域と家族構成

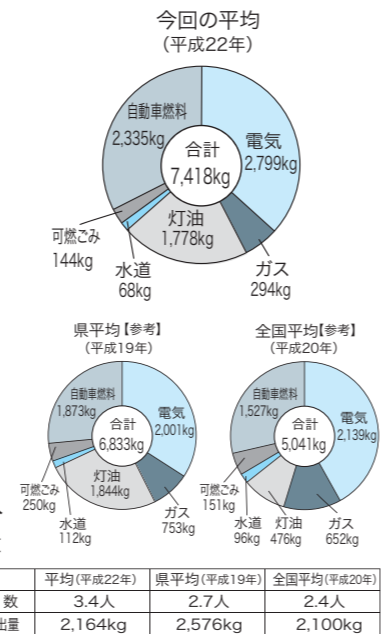


## 2. 1世帯あたりのCO<sub>2</sub>排出量は平均7.4t

平成22年のCO<sub>2</sub>排出量の平均をみました。

1世帯あたりのCO<sub>2</sub>排出量は7,418kg。1人あたりのCO<sub>2</sub>排出量でみると2,164kgです。最少排出量の世帯は2,562kg（1人あたり854kg）で最多は14,110kg（1人あたり2,350kg）でした。

参考として県平均（平成19年）と全国平均（平成20年）のデータと比較してみてください。21世帯中エコキュートやIHヒーターを取り入れている世帯が8世帯、太陽光発電を導入した世帯が4世帯ありました。その結果として電気の使用量が大きくその分、ガスの使用量が低く出ていると考えられます。



## 3. CO<sub>2</sub>排出量は削減できたのでしょうか？その努力とは？

21世帯のうち2年分を記入していただいた16世帯の平均をみると、平成21年では7,347kg、平成22年では7,305kgと微減でした。前年と比較し、CO<sub>2</sub>排出量を減らすことができた世帯は6世帯でした。特に20～30%と大幅に削減できた世帯が3世帯ありました。

### ①大幅に削減—太陽光発電の導入

3世帯中2世帯が平成22年初めに太陽光発電の導入を行っています。他の1世帯は引越しによるものでした。太陽光発電を導入した場合、日中に発電している余剰電力を売ることで、その電力量がマイナスに計算されるため削減が図られました。

### ②それ以外にどんな削減努力がされたのでしょうか？（取り組み者の記入から）

- ・できるだけ自動車を使わず、バスや列車を利用した。
- ・こまめにスイッチを切る。
- ・省エネ家電に買い替えた（冷蔵庫、電球型蛍光灯、LED）。
- ・蓄熱型暖房器、エコキュートに切り替えた。
- ・コンセントをぬいたり、待機電力をゼロにするための努力をした。
- ・家族が一室で過ごすようにした。
- ・お風呂は湯がさめないうちに続けて入った。
- ・ゴミの分別を徹底する。
- ・買い物はマイバッグを持参。
- ・子どもには布おむつを使用し、ゴミを出さないようにした。

しかし、他方でお孫さんをあずかっていると、家族に病気の人や、介護が必要な方が出たりで冷暖房に気を使わなければならず、灯油や電気の使用量が増えたなど、削減は簡単ではないこともうかがえます。

## 4. 記録し計算することで高まる意識！

2年間の環境家計簿をつけることで、「生活リズムを大切にしたい」、「資源循環型の生活を心がけたい」、「エコを心がけて生活したい」など、意識が一段と高まり、環境家計簿の取り組みが大いに活きたものとなりました。

## セミナーが開催されました。

### 「岩手県の温暖化防止への取り組み」を聞く。

昨年11月26日、当協議会主催でPoint1（大町）を会場に、講師として岩手県の温暖化対策担当課長の平井孝典氏をお迎えし、「岩手県の温暖化防止への取り組み」と題してセミナーを開催しました。当協議会の会員を中心とした約30名が2時間にわたる講演に熱心に聞き入りました。

講演内容は、これからの岩手県の環境施策の基となるものであり、私たち、一関地球温暖化対策地域協議会の役割や期待されていることを改めて考えさせられました。

当協議会としても、今後も、市民、事業者、行政との一層の連携を図り、CO<sub>2</sub>排出量の削減に向けた取り組みを行う必要があると再認識したところです。

以下に、講演内容の一部を紹介します。

### ●再生可能エネルギーの導入状況等

再生可能エネルギーの導入状況等では、全国からみた岩手県の導入実績の順位の説明がありました。風力発電（11位）、地熱発電（2位）、水力発電（4位）と岩手ならではの特性を生かしたエネルギーの導入状況が全国でも上位にありましたが、太陽光発電の導入実績が35位と下位にあることが分かり、今後、普及に力を入れる分野であると説明がありました。

### ●新計画「低炭素社会の構築」のための取り組み

県では、2011年度からの新しい環境基本計画（案）における施策の目指す姿として『二酸化炭素などの温室効果ガスを可能な限り排出しない社会の構築』と打ち出しました。

また、2011年度から2020年度までの10年間で、2020年度の温室効果ガス排出量を1990年度比で国と同様の「25%削減」の目標を掲げております。今後、削減目標に向かっては、森林等による二酸化炭素吸収源対策などを推進するとの説明がありました。



### ●一関市のCO<sub>2</sub>排出量推計

2007年度における一関市のCO<sub>2</sub>排出量推計では、約100万トン-CO<sub>2</sub>（岩手県では約1,300万トン-CO<sub>2</sub>、県全体の約8%）と環境省が示している簡易マニュアルなどによる各部門の数値を示しながらの説明がありました。



## ワークショップに参加して（参加者からの感想）

講演会のあと、ワークショップが開かれ、3つのテーマについて全体討議を行いました。

初めの「省エネルギー社会を創る～2020年までに1990年比でCO<sub>2</sub>の排出量を25%削減するには～」というテーマでは、女性の発言者が多く、各自が家庭での積極的な省エネルギーの取り組み例を挙げて、その成果を発表しました。

次の「新エネルギーへの共通理解」のテーマでは、「太陽光発電」と「木質バイオマス」の導入について、参加者を推進派と慎重派に分けて、各々のメリットと、デメリットについて激論しました。

最後の「啓発活動はどのように展開すべきか」のテーマでは、自然エネルギーのキャンペーンなどは、既存の団体（自治会など）と一緒にすることがより効果的だということや、エネルギーを各地域で自給出来るようにするにはどのようにしたらよいか、また、省エネルギーは省マナーになることもアピールして行く方が良いということなどが、進行係から提案されました。

「ワークショップ」とは、（参加者が自主的に活動する）研究集会のことです。今回参加出来なかった方は、次回には是非参加して自主的な活動に結び付けて頂きたいと感じました。

## 薪ストーブ導入講演会を開催

2月20日、一関市滝沢地内の民家（陣の里）をお借りして、薪ストーブ導入講演会を開催しました。



当日は、薪ストーブ利用者、設置希望者、環境に関心のある方など約50名が参加しました。

講演会では、花巻市から講師として薪割りの深澤光氏をお迎えし、「森と暮らしを結ぶ薪利用」と題して、薪の良さや、薪ストーブの効果の講演がありました。続く薪割り体験会では、一関薪の会の皆さんの協力を頂き、薪割りの実践や、注意点などの説明がありました。

参加者は、これら講演などに熱心に聞き入るとともに薪割りの基本を学びました。薪割り体験会終了後は、薪ストーブで調理したスープや、参加者が自ら持ち寄った手料理など、温かな料理を囲み、意見交換を通じ、親睦を深めた1日となりました。

